31-1161

日向薬事始め（その２）―賀来飛霞と延岡藩での採薬―

○岩井 勝正[1]，井本 真澄[2]，宇佐見 則行[2]，山本 郁男[2]（[1]吉田病院薬，[2]九州保福大薬）

【目的】先に我々は日向における薬学の創始者の一人として秋月橘門（医師・本草学者）をとりあげ彼と彼の業績を報告した[1)]。本報では秋月橘門が日向における薬草調査指導に隣藩の豊後（大分）から招いた賀来飛霞（文化１３年（１８１６）～明治２２年（１８８９））について述べる。

【概要・結果・考察】賀来飛霞は豊後西国東郡高田（現豊後高田市）に生まれた。父有軒は三浦梅園に学び、小野蘭山について本草学を修め、医を業として帆足万里と特に親交が深かった。飛霞はその三男であり、異母兄（佐一郎佐之）は長崎にて蘭医シーボルトに医学・植物学を学ぶという家系に育っている。

賀来飛霞は秋月橘門との交流から、延岡内藤藩７万石（以下延岡藩）の招請に応じて、弘化２年（１８４５）に延岡に入り、藩領内の各地の採薬調査を行っている。採薬調査の日程は約２ヶ月間に及び、延岡藩の目指す殖産興業の一環としての薬用植物の利用、栽培に影響を与えた人物と考えられる。これは、橘門が従来から本草学を根拠とした薬草利用を人々に説いており、それが賀来霞来の来藩によって本草学に基づいた採薬調査という形で具体化されたと言える。彼はこれをまとめ「高千穂採薬記」（弘化２年（１８４５））として著している。従って、賀来飛霞もまた日向における薬学発祥に貢献をしたと言える。

１）岩井勝正，井本真澄，山本郁男，日本薬学会第 124 年会要旨集３（大阪），p211（2004）．